

津嘉山正弘さん

1926(大正15)年4月25日生まれ
当時の本籍地 沖縄県

陸軍

独立混成第44旅団重砲兵第7連隊

戦地 大里村、玉城村(共に現南城市)



●1945(昭和20)年3月1日 現役兵として独立混成第44旅団重砲兵第7連隊第2中隊に入営

初年兵は知念岬の陣地で1ヶ月初年兵教育。本来は野戦重砲ではなく要塞砲の部隊だが、要塞重砲は1門もなく、野戦重砲が2門。砲の訓練。6名1組で、砲の分解掃除とか、実包射撃は1回だけ。やがて砲がないので歩兵部隊になっていったが、上官も歩兵戦闘を知らないので全部やられていく。

●戦闘

最初は、大里村(現南城市)の大里城址の側の西原(いりばる)で敵とぶつかった。中隊長は日本刀を抜いて行ったが頭を撃たれてやられて、分隊長もまた頭をやられてひっくり返った。中隊長も小隊長もやられたもんだから、我々はすぐ逃げたんですね。前も後ろもやられて、鉄帽もあたらなくて、私なんか戦闘帽だけ被って。前の兵隊は鉄帽を被っているのにすぐにひっくり返って。その上から飛び越して行って後退していったんですね。どこの部隊か分からんが少佐殿が日本刀を立てて立っておる。「コラ、貴様ら、帝国軍人が敵に後ろを見せて逃げるとは何事か」と怒るんです。やれっと言うんで、また向ってやったんだけど、またバンバンやられたもんだから、もうそこからは誰がいるか分からなかった。

何も恐くない。戦闘に向って周りがバタバタひっくり返っても何の心配もない。恐怖心がない。極限状態。何時自分がやられるか分からんと言ってですね、死ぬのを見たら楽だなあという感じだった。この苦労が一瞬にして無くなるという。戦闘と言うのはそんなもの。

2回目はさかんに鉄砲を撃っていた。肩に反動があって痛くなって置いて伏せたと同時に、何mか先に迫撃砲弾が落ちて爆風で朦朧していると、側の兵隊が「貴様、どこも怪我してないぞ」と言われたので意識を取り戻したら、1mぐらいの側に松の根っこから飛ばされている。同じ部隊の兵隊が顔に弾を受けたり太ももをやられたり、朝飯を運んでいこうとしていたのも全部やられている。握り飯もそこにほったらかして、すぐに鉄砲を取って応戦したんですが、あの時は九死に一生を得た感じだった。

今度は玉城村の喜良原(きらばる)という所ですね。迫撃砲でやられたんですね。伏せると同時に寝てしまって、一番前で。隣の兵隊が「貴様寝ているのか。皆逃げたぞ」逃げて走って行くのにみんな弾が当るんですね。だけど歩いて行ったらなんでもなかったんですね。歩いてゆっくり。弾は前に行くんですね。走って弾に当たった連中がおった。戦闘というのはそんなものかなあと思って。

照明弾が上がって道に伏せて寝てしまって、目が覚めたら誰もいないんですよ。走りに走って陣地に行ったら皆帰っておったんですが。「貴様やられたんじゃないかと思ってたよ」と同年兵に言われて。戦闘というのは今考えると馬鹿馬鹿しくて。敵も死んだのもおるはずですけどね。一発一発と自動小銃では勝負にならないですよ。

鹿児島出身のF一等兵と、牛島司令官が自決した日まで一緒に行動してる。海辺の岩の中に寝そべっているのをどこからか飛んで来たか破片にやられて死んでいる、私が水を汲んでくる間に。「妻子は京都に疎開させているから何時死んでもいいよ」と言うから、「何でそんなこと言うか」と叱ったらその翌日亡くなった。

●1945(昭和20)年6月24日 米軍に投降、 同月末 ハワイへ送られる

送られたのは沖縄人だけ。本土出身の兵隊は送られなかったが、他府県出身の兵隊がうちなんちゅうだと言って一緒に行った人もいた。死んでもともと、恐くはなかった。サイパン経由で行ったがハワイに行ったら殺されると船から飛び込んだ者もいた。2世の通訳がいて丁寧に扱っていたが。

捕虜が調理をしていた。もともとお店を経営していた人たちがコックをしていて、ご飯もあり、沖縄の料理が食べられた。朝はパン、毎朝製パン工場から運ばれていた。食べものの心配はないし優雅な生活。パンを取りに行くと、ホノルルのメイン通りから帰ろうねと言って、15分で帰って来られるところを1時間かかって。

仕事は毎朝連れて行く、洗濯や軍作業。玉砕した島からも将校も来ていたが、将校は分けられて、労働には従事させてはいけないという事で。アメリカ兵は捕虜でも将校を見たら、イエスサー、イエスサーで敬礼していた。

●1946(昭和21)年10月15日 ハワイ出港、 同年11月6日 浦賀経由で沖縄に戻る

(取材日:2013年2月4日)